

論文

経済的にゆとりのない青少年の学校生活と人間関係**—低所得層の生徒における親しい人間関係をもとに****School Life and Human Relationship of Youths who cannot Afford to Pay the Educational Cost: Based on Youths' Intimate Relationship in Low Income Class**

キーワード：『子どもの貧困』『社会関係資本』『ライフコース形成』

小澤 昌之

OZAWA, Masayuki

(青山学院大学大学院法務研究科・助手)

1. 問題の所在

近年、生活保護を受給する家庭や低所得者層の子どもを中心に、両親、教師や友人などから十分な学習支援やサポートを受けられず、成人後も貧困から抜け出せなくなる「貧困の連鎖」が深刻な問題となっている。厚生労働省の統計によれば、2013 年中に地方自治体より生活保護費を受給した世帯は、戦後以降の統計で最も少なかった 1992～1993 年度（58.6 万世帯）に比べ約 101 万世帯多い 159.6 万世帯に及ぶ。また 2010 年度の「子どもの相対的貧困率¹⁾」は 15.7%と 9 年前の推測値より 1.2%増加した。いずれの統計とも、1990 年代から現在にかけて、貧困家庭に育つ子どもの生育環境が一段と厳しい状況になっていることが反映されている。

貧困家庭の教育格差に着目した阿部（2008）は、生活に対する困窮さを肯定する中高生ほど、現在の生活において金銭的に余裕がなく、相談相手がいないと回答する割合が多いなど、希薄な人間関係にあることを指摘した。そのことから子ども時代の生育環境は貧困の再生産に影響を及ぼすとされる。そこで政府は貧困の連鎖を断ち切り、自治体による支援サービスの強化により教育機会の平等を実現するため、2014 年 1 月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（子どもの貧困対策法）を施行した²⁾。子どもの貧困対策法では、低所得世帯への無料学習支援や「子どもの相対的貧困率」削減などを主要施策としており、すでにいくつかの自治体では、貧困家庭向けの子どもの学習支援など独自の政策を実施しているところもある。このように近年、政府や自治体が子どもの貧困問題に注目する背景には、子どもの相対的貧困率が年々悪化しているだけでなく、世代間の貧困の連鎖が、将来の社会保障費負担の増大を招く可能性を危惧していることが考えられる。

そこで本稿では、経済的にゆとりのない家庭の中学・高校生を対象とした聞き取り調査をもとに、貧困家庭の青少年が織りなす生活と人間関係の実態に焦点を当てる。具体的には、経済的にゆとりのない中高生はどのような世界で暮らすのか、そして他の友人や教師など身近な他者とどのようにつながりを得ているのかを検討する。

2. 先行研究の知見と課題

2.1 貧困家庭に暮らす子どもに関する先行研究

貧困家庭に暮らす中高生の歴史的系譜を俯瞰すると、終戦直後の日本では、教育学や教育社会学などの領域を中心に「貧困と教育」という問題関心から、貧困の実態が中心的な課題として注目されてきた（小西 2006）。しかし高度経済成長を経て、競争を通じて将来の地位が配分される「競争の教育」（久富 1993）期に突入すると、貧困研究全般は衰退した。高校・大学の進学率が大幅に上昇し、すべての階層が受験競争に巻き込まれる「大衆教育社会」が到来すると、「貧困と教育」への関心が薄れていくことになる（荻谷 1995）。その後、イギリスで論争のあった子どもの「貧困の社会的再生産」概念が日本に伝播された 1980 年代より、日本でも貧困家庭に暮らす子どもの再生産に注目した研究が進んだ³⁾。

近年日本では、貧困家庭に暮らす中高生は、高校や大学に進学できるだけの学力を身につけたとしても、親に授業料や教育費を捻出する経済的な余裕がなく、進学を断念するという。仮に彼らが進学できたとしても、依然として劣悪な学習環境に置かれており、就職後は低階層の青少年ほど非正規雇用者に滞留する傾向にある（乾編 2006）。また、子どもをサポートすべき重要な他者であるはずの家族は、親世代自身が十分な教育を受けていないため、親の教育方針に一貫性がなく、子どもへの学習支援能力が脆弱であるとされる（西田 2009; 大澤 2009）。したがって貧困家庭に暮らす中高生は、家庭の経済的条件やサポートの欠如などから高卒後の進路が狭められており（小西 2004）、「親の関係資源の不足→子どもの低学力→教育達成のデメリット」という貧困の再生産図式が浮かび上がる。

2.2 本稿における研究課題

本節では先行研究より導出された貧困の再生産図式を検討するため、貧困家庭の中高生を取り巻く社会関係資本（social capital）の影響に注目する。社会関係資本とは、「何らかの信頼に媒介された関係性やコミュニケーションの場であることを通じて、人の行為を生み出す機会・環境として作用するもの」（平塚 2006: 395）である。社会関係資本は従来、教育との関連では、学力や教育達成に影響する資源として考えられてきた（高田 2008）。本稿では、マイノリティの教育達成と社会関係資本との関連性を説明するのに適しているとされるコールマンの社会関係資本の議論に着目する（木村 2008）。

コールマン（1988=2006）は、社会での人間関係のネットワークを説明する概念として、「世代間閉鎖性」（intergenerational closure）を提起した。「世代間閉鎖性」とは、学校で子ども同士が友人であれば、結果的に親同士も仲良くなるように、行動の主体が親子関係と家族外部との関係を絡めて相互に連結されているネットワークを指す。「閉鎖性」をもつネットワークは、一定程度他者の視線や思考を気にする必要があるが、悪いことをした子どもを親同士が連携して説得できるように、主体間の連携により行動の監視・誘導を行い効果的な制裁ができる。コールマンによれば、「世代間閉鎖性」は親子関係や外部の親密

な他者による親密なネットワークを通じて効果的な規範を形成することから、学校に限らず様々な観点で、子育てする親にとっては一定量の社会関係資本となり得るという (Coleman 1988=2006: 221)。だがマイノリティのコミュニティでは、集団の結束力が強すぎると、外部の他者に対する積極的排除や規範の低下などのように、排他性を有する「否定的な」社会関係資本を形成する場合がある (木村 2008)。そこで親や地域の人々、学校や部活などの身近な友人関係のように、日常生活の中で依拠する社会関係資本の違いによりどのような特徴があるのかについて、以下の2点の視点をもとに考察を行う。

第1の視点は、貧困家庭に暮らす中高生の学力と社会関係資本の関連性である。1990年代以降、量的調査における先行研究では、出身階層の教育格差と学力の関係から貧困家庭の現状を分析する知見が蓄積されている (荻谷 2001 など)。また、貧困地域に住む生徒を対象とした質的調査研究を整理した高田 (2008) は、貧困家庭の子どもが低学力となる背景として次の3点を指摘した。第1に落ち着いて勉強できる場所がなく、保護者からの学習援助が少ない。第2にテレビやゲーム機等の享樂的所有物の所有率が高く、享樂的な生活に惹かれがちである。第3に保護者や友達との関係が安定しないため自尊感情が低く、学習に意欲的に取り組めずに学校から離反する価値観を仲間集団の中で保持する。

学力との関連性の先行研究を俯瞰すると、生徒は比較的学力水準が低い上に、本来生徒をサポートする役割を担う教師や友人といった「援助のネットワーク」が脆弱である結果、学校生活への不適応を起こすという (大澤 2009; 青木編 2003)。また子どもを取り巻く親の積極的参加や友人からの働きかけは、学校の教育的活動を高め、子どもの学業的パフォーマンスを高めるとされる (池田 2003; 古賀 2004)。したがって貧困家庭に暮らす中高生の学力実態を捉える際には、生徒における学習上のサポート役を担う社会関係資源とのつながりを精査する必要があるだろう。第1の視点では、貧困家庭の中高生に関する学習実態と、生徒自身を取り巻く社会関係資本との関連性について考察を行う。

第2の視点は、貧困家庭の中高生の進路形成過程である。具体的には、家庭の貧困状況が中高生の進路選択や将来展望と関連するかどうかを検討する。先行研究は、低所得世帯の子どもには将来の収入や労働が不安定であることや、就学期においても成績や登校状況、教育費の面で多くの格差があることを明らかにしてきた (乾 2006; 青木・杉村編 2007; 阿部 2008 など)。また貧困家庭の生徒は軒並み学校成績が低く、教師からの支援が十分に受けられないことから〈学校のこだわりの希薄さ〉⁴⁾を抱くという。生徒は学校生活から落ちこぼれた結果、進路決定が不安定な生徒の増加へと結びつく (上間 2009) とされる。

学校適応に関する先行研究では、低所得世帯の生徒は将来の収入や労働が不安定であることや、学齢期でも成績や登校状況、教育費の面で多くの格差があることを明らかにしてきた (青木・杉村編 2007; 阿部 2008)。そこで第2の視点では、貧困家庭に暮らす青少年は、日常生活の中で依拠する社会関係資本の相違によって、進路選択や将来展望といった進路形成過程に違いが現れるのかを検討する。

表 1 調査協力者の概要

	性別	年齢と学年	同居家族	世帯主の職業	学校属性および偏差値
A	男性	16歳・高校1年	父、母、弟3人	タクシー運転手	公立・高校共学（40）
B	男性	17歳・高校2年	母	派遣社員（事務）	公立・高校共学（47）
C	男性	17歳・高校2年	祖母、母、兄	准看護師	公立・高校共学（44）
D	女性	17歳・高校3年	祖母、母、兄	自営業	公立・高校共学（48）
E	女性	17歳・高校2年	母	派遣社員（事務）	公立・高校共学（43）
F	男性	13歳・中学1年	母、兄、妹	派遣社員（通信）	公立・中学
G	男性	15歳・中学3年	母、姉3人	自営業	公立・中学
H	女性	15歳・中学3年	母、兄	パート	公立・中学
I	女性	14歳・中学3年	父、母、姉	美容師	公立・中学
J	女性	15歳・中学3年	父、母、姉、弟	パート	公立・中学
K	男性	18歳・高校3年	父、母	寿司屋の職人	公立・高校共学（47）
L	女性	17歳・高校2年	父、母	会社員（情報関連）	私立・高校女子（68）
M	女性	18歳・高校3年	父、母、妹	銀行員（都市銀行）	私立・高校共学（55）
N	男性	17歳・高校2年	父、母、妹	インテリアデザイナー	公立・高校共学（49）
O	女性	18歳・高校3年	父、母、弟	システムエンジニア	公立・高校共学（48）
P	男性	17歳・高校2年	祖父、父、母、兄	会社員（鉄道）	私立・高校共学（58）
Q	女性	17歳・高校2年	父、母、弟2人	会社員（不動産）	公立・高校共学（59）
R	男性	16歳・高校1年	父、母、妹	会社員（印刷）	私立・高校男子（75）

注）年齢と学年は調査当時のものを記載。Cの世帯主は祖母。中学校は偏差値等の比較できるデータはないものの、富裕層／貧困層の集中しない平均的な地域に通う生徒を選定している。

3. 調査データの概要

本稿で用いる調査データは2008年9月～10月と2009年12月～2010年2月に、韓国青少年政策研究院（NYPI）と慶應義塾大学 GCOE 市民社会ガバナンス教育研究センター（GCOE-CGCS）、慶應義塾大学 YES 研究会が共同で実施した「青少年の生活に関するパーソナル・インタビュー調査」（研究代表者：現帝京大学文学部渡辺秀樹教授）である。本調査は首都圏（東京、神奈川、千葉、埼玉）在住の中学1年生～高校3年生を対象に面接調査を実施した。対象者の内訳は、2008年調査は全員、公立校に通う中学生5名（男子2名、女子3名）、高校生5名（男子3名、女子2名）、2009年調査は高校生8名（男子4名、女子4名）の計18名である（表1）。本調査はインタビュー・ガイドを用いた半構造化インタビューの手法を採用し、専門調査機関に選定を業務委託し調査を行った。

先行研究における貧困家庭の議論によれば、世帯の子ども数の多さや母子家庭などのひとり親世帯などの家族的要素（小西 2004；中澤 2009 など）、生活保護受給者や「年収300万円以下」といった所得的要素（大澤 2008；盛満 2011 など）を「経済的なゆとりのなさ（貧困家庭層）」の基準として設定している。そこで、対象者の選定に当たっては上記の議論をもとに、2008年調査では以下の3つの条件が全て適合する対象者に実施した。第1に対象者の親が「収入があまり多くない中で、お金に苦労しながら子育てをしている」と自覚している。第2に年収が少ない（300万円以下）。第3に「子どもが多い（対象者自身を含め3人以上）」「公営住宅・家賃の低いアパートに居住」「ひとり親（母子家庭で祖父母と同居していない）」「借金で苦労している」のうち2つが適合する生徒を対象者とし

て選定した。一方で 2009 年調査では貧困層の中高生の実情を比較するため、前述の 3 条件にすべて該当しない対象者を対照群として選定した（対象者の親の世帯年収は全員 500 万円以上）。選定基準としては、居住地域（東京、神奈川、千葉、埼玉）や男女の性別、中学・高校のバランスを考慮し、バランスの偏りが生じないように配慮した。

半構造化インタビューの概略としては、まず調査前に対象者は身近な人間関係を把握する目的で、1 つの円が書かれた紙 1 枚に、「友人」「家族」「学校」「その他」の 카테고リーに分けて名前を記述した（ネットワーク図：2009 年調査では友人関係を中心に図を作成している）。その後予め用意したインタビュー・ガイドの順に友人関係、家族・教師との関係、学校生活、携帯電話・インターネットの利用実態、日常の学習習慣・成績、将来の進路展望へと進められたが、場合により適宜話題を膨らませた。調査時間については概ね 75 分程度で、インタビューの実施は、研究会メンバーのいずれかが同行するものとし、司会（A 社）と対象者、そして研究会のメンバーの三者により行われた。なお調査に際しては、個人情報を取り扱う調査であるため、調査機関側と研究グループ間で法令順守の取り決めを行い、対象者とはデータを研究目的のみに利用する承諾を得た上で実施した。

4. 調査結果

4.1 対象者のとりまく社会関係資本のあり方—家庭環境・学校・友人関係の語り

本節では貧困家庭の中高生が、身近な他者とのつながりをどう得ているのかを検討するために、身近な他者とその周辺の語りを考察する。なお、友人・教師といった身近な他者との関係を検討するために、日常生活において自己評価や進路形成に影響する準拠集団である「重要な他者」（大澤 2008）に注目し、「重要な他者」の位置づけが立場によりどう変化するのかを貧困家庭層と対照群に分けて検討する。

家庭環境に注目すると、貧困家庭層の生徒は家計が困窮しているせいか、親がほとんど働きに出ている関係で、親から進学や成績などには口出しされるものの、生活面で干渉を受ける様子はあまり見られない。生徒は親が「自分勝手」であることや「キレル」ことを嫌うものの、「私がちょっと相談に乗ったりすることもあるし、結構（親から）家のこととかも相談される」（H）のように、対象者である生徒が、親の心情を配慮する語りが見られた（10 人中 9 人）。親への気遣いを示す姿勢は、どの対象者にも見られ、親に対し悲観・反抗の態度を示すのではなく、相談相手や「友達」と同等の関係で接すると考えられる。

対照群の場合は、生徒と親との関係は良好で、中には「尊敬すべき人」（K）「フレンドリーな感じ」（R）といったように、親との信頼関係がうまく築けている人もいる。ただ、親の子に対する干渉に関してはほとんどないものの、貧困家庭層の生徒とは若干異なり、「多分受験期が一番」（Q）のように、親と進路を巡って衝突した生徒もよく見られた（8 人中 4 人）。また対照群の生徒は概ね成績や進学、友人とのもつれなど、日常生活で困ったことがあるときは、親と家族会議を開いて相談していた。また親への気遣いを示す姿勢

表 2 調査対象者の人間関係

	学校担任との 仲の良さ	学校は 好きか	友人の数			友人からの影響 ／具体的内容
			親友数	学校内	学校外	
A	×	×	3	5	3	○（親友3人）／遊び
B	×	×	5	9	10	○（親友3人）／遊び
C	×	×	6	7	6	×
D	○	×	2	4	1	○（親友1人）／性格
E	×	○	3	6	0	×
F	△	×	5	5	2	×
G	○	○	6	13	3	○（親友1人）／部活
H	○	△	4	10	1	×
I	△	○	5	18	0	○（親友2人）／漫画
J	○	○	2	12	1	×
K	○	○	2	11	18	○（親友2人）／部活・勉強
L	△	△	8	9	3	○（親友3人）／勉強・進路
M	○	○	8	5	6	○（親友3人）／勉強・音楽
N	○	○	7	7	6	×
O	○	○	7	14	8	○（親友2人）／成績
P	○	○	6	13	5	○（親友1人）／車
Q	○	○	6	10	2	○（親友1人）／進路
R	×	△	9	13	2	○（親友3人）／部活・勉強

注）「親友の数」は、学校外・学校内にいる親友の合計。親友には全員、異性の友人はいない。

は対照群の生徒も共通しており、何でも相談できる相手として接すると考えられる。

学校生活（表 2）に関し貧困家庭層の生徒の語りに注目すると、対照群の生徒はほとんど「教師のことが好き」なのに対し（8 人中 6 人）、「教師のことが好き」な生徒が少ない（10 人中 4 人）。例えば、1 年の 1 学期にバドミントン部を辞めた後、回転寿司店のアルバイトをする高校 1 年の A 君は、「担任はよくわからない人です。副担任とは性格が合わない。副担任は周りを見ているとか言って実際そこまで見てないんです（以下傍線は筆者）」と、教師による行動の理不尽さや、面倒見のなさをよく理由に挙げていた。ただ、美術部に友人の多い I さんのように、担任との相性はそれほど良くないものの、「確かに授業は面倒臭いし、時々行きたくないと思う時もあるけど、友達に会うと楽しい」という形で、学校での親しい友人の存在によって学校充実感が高められる中高生はよく見られた。

「学校が嫌い」と答えた生徒は 10 人中 5 人だが、「学校が好きかどうか」と「担任が好きかどうか」が一致しない生徒が数人見られた。例えば調理部の E さんは、「友達と話せるところが好き」と言うものの、「優しい時にすごく優しいけど、関係ないところですごく怒ってくる」のが担任の嫌いな理由だという。このように、授業進度や担任との相性、教師からの生徒指導などが学校忌避感を抱く要因だと思われる。ただし貧困家庭層の生徒は、遅刻や欠席が多く、学校が嫌いという意味の怠学志向をもつとは言いきれない。むしろ、「学校が嫌いな時は、たまに人（学校の友達）と接するのが疲れちゃう」（H）のように、学校から逃避したいという意味の「脱学校」志向と捉える方が適切であるだろう。

また保健室の先生や小学校・幼稚園時代の恩師を、信頼の置ける先生として挙げる生徒

が多いことも貧困家庭層の生徒のみに見られる特徴である。実際に、保健室の先生（ABH）や、以前の担任や教科の先生にお世話になる生徒が多い（ABEFGHI）。放課後によく池袋などの繁華街で友達と遊ぶ B 君は、「僕は小学校とか幼稚園に遊びに行くのが好きなんです、なんか先生のくせに、友達みたいな感じで話してくれる」という。このように生徒にとって保健室の先生や恩師は、教師の干渉から逃れられる「居場所」という意味を持つと同時に、人生の手本となる役割モデルとして機能していると考えられる（大澤 2009）。

対照群の高校生の場合は、「学校が好き」「担任が好き」と答えた生徒はそれぞれ 8 人中 6 人と、貧困家庭層の生徒と比べると学校生活を肯定的に捉える生徒が多い。例えばバスケット部に入っていてイタリアンレストランでアルバイトをしている O さんは、「先生とも仲いいし、友達とも仲いいし、嫌なことがないんです」とした上で、授業中에서도「端と端でお喋りしたりとかもしてたし、楽しい」と肯定的に話していた。それでも唯一担任の先生が嫌いな R 君は、学校は嫌いではないとしながらも、「クラスが結構荒れていて、悪いグループがいるんですけど、抑えられないというか、（教師が）むしろナメられてるという感じで、役に立たないなという感じ」と、教師の授業運営を批判的に捉えていた。しかし全体的に対照群の生徒は、貧困家庭層の生徒とは異なり、遅刻や欠席、「学校から逃れたい」といった脱学校的志向を持つ生徒は少ない。また、R 君も「（所属している）テニス部が、とりあえず安定感がある。（部員の友達と）いて楽しいっていうのはある」と話すように、学校生活では部活動やクラスの友達が学校での充実感を促す要素となっていると見られる。

最後に友人関係をみると、人間関係データ（表 2）からわかるように、どの生徒も 10 人前後の「友達」の名前を記入していた。注目すべきなのは貧困家庭層・対照群の生徒の間で、友人と知り合うプロセスや場所、友人からの影響の度合いが異なることである。

貧困家庭層の生徒は、対照群と比べ塾・予備校などの友人が少ない分、小・中学時代の幼馴染みとの付き合いが続く生徒が多い。最も親友の数が多い高校生の C 君の語りによれば、C 君が友人と出会ったきっかけは、「K ほか 5 人は中学（時代）の友達で、それからズルズルとずっと遊んでいてだいぶ付き合いが長くて、わりと気さくに話せる」と言う。親友 6 人とは、自宅近くの川の散歩でだらだら過ごしたり、カラオケに行ったりしているが、渋谷や原宿などの歓楽街には一切遊びに行かない。友人からの影響は高校の友人を含めあまりないものの、「K とは学校サボるとかでだらしない」ところが似ているという。

生徒たちの「語り」を俯瞰すると、貧困家庭層の生徒は、自己をさらけ出し、何の遠慮もせず気心を使わないなどの親密性の程度が、親友として付き合う重要な要素となっている。中学生の場合は、部活動や塾などの友達よりも小学校時代や現在のクラスの同級生（5 人全員）、高校生の場合は、同じクラスの友達や部活動やアルバイト先等の友達よりも、小・中学校時代の幼なじみや同級生（5 人全員）を親友として選択していた。学校進学により離れ離れになっても、親友としてのつきあいが続く傾向は半数近くの対象者に見られ、「地元つながり志向」（新谷 2002）に近い特徴だと考えられる。また友人からの影響（表 2）

については、10人中5人が影響を受けていると回答しており、主に部活や趣味・遊びなど身近な出来事で親友からの影響を受けているとみられる。

次に対照群の生徒に注目すると、貧困家庭層の生徒に比べ学習塾や予備校の友人などが増えるほか、小・中学校時代の幼馴染よりも、高校で会う友人と親しくなる比重が高まる。そこで親友の数が最も少ないものの、友人の数がかなり多いK君の語りに注目する。「小学校時代から同じクラスで、よく遊んでたんですけど、中学校に入っても、野球部とか学校でもつるんで、よく遊んでいい思い出ですけど、相談相手にもなってくれますし、いい親友です」。高校時代で知り合った友達7人はクラスメートで、普段から一緒に弁当を食べたり、よくボウリング場やゲームセンターで遊んだりしている。K君の友人は、大きく分けると小学校時代と中学の野球部、現在の高校と3つのタイプに分かれるが、それぞれ話す内容は異なり、「付き合いが長いと、空気読む的に、自分が言った事をフォローしてくれたり、言った内容を笑いに変えたり」する。友人からの影響については親友として挙げた2人全員から野球の技術でかなりの影響を受けており、特に頭のいいS君とは高校進学以降にライバルだと意識するようになったという。

対照群はK君をはじめ、「大して何も話さなくても通じちゃう」(L)など心理的な安定感を親友として重視していた。このように対照群の生徒は、学校内・外のグループを問わず、友達グループの所属によって親密性や心理的な安定感を維持しており、親友として重視するタイプは貧困家庭層とほぼ共通している。ただ貧困家庭層の生徒と同様に、友人からの影響を受けたのは8人中7人と多く、部活や趣味の影響を受ける生徒もいるものの、部活よりも勉強や進路など学習面の影響の強い生徒が多いことが異なる特徴といえる。

身近な他者との語りをまとめると、「家族との仲が良く、コミュニケーションをよく取り合う」「何の遠慮もせず気心を使わないなど親密さが親友として重要な要素となる」が共通の特徴として見られた。貧困家庭層と対照群の双方で異なる点としては、以下の3点が見られた。第1に対照群の生徒の方が成績や進学、友人とのもつれなど些細なことでも相談する傾向にある。第2に貧困家庭層の生徒は対照群より学校が嫌いと答える生徒が多い。第3に貧困家庭層は遊びや趣味など身近な事柄から友人からの影響を受けているのに対し、対照群の生徒は友人から勉強や進路の影響を受ける比重が大きかった。

4.2 対象者の学力と学習環境

本節では学習観・学力の実態と教師 - 生徒関係の語りに着目する(表3)。学習環境に関しては、貧困家庭層の生徒は、学習時間はどの対象者も家での勉強時間がない、もしくは比較的短い時間に留まるものの、受験期の生徒は、学習塾に通う形で学力の向上を図っている(学習塾等の利用者は10人中3人)。対照群の生徒は、家での勉強時間がない生徒は3人いるものの、ほとんどの生徒は日常的に学習する習慣は身についており、受験期に近づけば近づくほど学習時間が更に多くなっていた。ただ貧困家庭層の生徒の中には、対照

表3 対象者と学習に関わる基本データ

	学習時間	成績	主な勉強場所	授業満足度	友人の学力	学習塾通学
A	ほとんどなし	上の方	自分の部屋	×	△	×
B	なし（試験前に友人と勉強）	中の下	飲食店	×	○	×
C	ほとんどなし	下の方	学校	×	×	×
D	なし（試験前に要領よくやる）	中	自分の部屋	△	○	×
E	10分くらい（試験前は1時間）	中	自分の部屋	○	○	×
F	5～60分（宿題と復習中心）	中	自分の部屋	△	×	×
G	塾を含め大体3時間くらい	中の上	塾・自分の部屋	○	○	○
H	10分～1時間（試験時は2-3時間）	中の下	家の居間	△	×	△
I	ほとんどなし	中の上	家の居間	×	△	○
J	大体2時間くらい	中の下	自分の部屋	○	×	×
K	1-2時間	中	自分の部屋・塾	○	△	○
L	5時間（試験時には最大10時間）	上	自分の部屋・塾	△	○	○
M	6時間（受験時は最大12時間）	中の上	自分の部屋・塾	○	○	○
N	ほとんどなし	中	友達の家・予備校	○	×	○
O	なし（試験前に要領よくやる）	上	自分の部屋	○	○	×
P	1時間くらい（試験時はよくやる）	中	自分の部屋	○	×	×
Q	なし（試験時は2-3時間）	中	自分の部屋・塾	○	△	○
R	3時間（休日は5時間程度）	上	自分の部屋	△	○	○

注）「学習塾通学」の△は、学習塾は利用していないが、通信教育等の学習を受けているもの。

群の生徒の学習時間とそれほど変わらない生徒もいることから（FGJ）、貧困家庭層の生徒に中にも日常的な学習習慣が身についた生徒もいることに注目すべきだろう。

次に対象者の主な勉強場所に注目すると、貧困家庭層の生徒の半数以上は自分の勉強部屋があり、客観的に見れば勉強する環境が整っていた。だが学習習慣に関する質問が出されると、「（家で）しない。教科書開くのすごく嫌いだから」（E）「学校は学ぶ場というか、家はリラックスしたり休養とかを取る場所だと割り切ってる」（H）というように、自宅学習する機会が少ない生徒がほとんどだった。彼らは家庭を休養場所として割り切っているため、家庭での学習意欲が比較的低いことが背景として考えられる。対照群の生徒は経済的に余裕があるせいか、自分の部屋のほか、塾・予備校を勉強場所として回答している。対照群の生徒の学習時間が多い要因としては、「私の脳内を一番占めているのは受験のことなんで…」（L）のように、大学受験対策のため必然的に学習時間が増加すると考えられる。

成績と学力に関し貧困家庭層の生徒は、中学生は高校受験という目先の目標が明確であるせいか成績中位がほとんどであるものの、高校生は上の方から下の方までばらつきが見られた。授業については満足している生徒は少数に留まる上、他の生徒から授業妨害を受けているせいか、集中できず不満を抱く子が多い。その背景には、生徒の通う高校の学校ランクや、中学の通学地域等の事情だけでなく、対象者本人の授業理解に対する準備不足のほか、教師の授業内容に対する配慮の低さなどの要因が挙げられる。

C：（学校は）好きではない。とにかく朝が辛い。（授業中に寝ていて先生から何も）言われない。みんな寝ているので起き上がると3分の1がハヤーッとなっていますよ。（先

生からは授業では別に)寝たきや寝ろみたいな。

I: 学校の授業が面白くないんです。今行っている塾はすごく内容が面白くて、教わると面白いように解けちゃうから楽しい。学校だと(授業の先生が)一人一人に教えている暇もないから、どんどん進んじゃうからどうせ解けないし。

対照群の生徒の場合は、高校ランクは中堅進学校～難関校とバラバラであるものの、概ね中～上とやや高めの成績をとっている。また授業に満足している生徒は半数以上を超えていることから(表3)、比較的學校に適応している様子が見て取れる。その背景には、学校内には親しい友人がおり、授業出席をつなぎ止める役割を果たすほか、生徒に相性の合う教師の授業を受けられることが、結果的に学校適応の促進につながると考えられる。

M: 朝起きるのが辛いだけで、着いたら友達にも会えるし、授業も楽しいし。行くこと自体は好きです。(一番どんなところが好き?) 友達と会えるところ。

O: 好きです。先生とも仲いいし、友達とも仲いいし、嫌なことがないんですね。高校1年の時は、友達もクラスに少なかったんですけど、2年生の時に、今のクラスになって、仲いい子ばっか集まっちゃったんですすごく毎日楽しいです。

但し友達の成績・学力を気にするか(表3「友人の学力」)に関しては、貧困家庭層の生徒では、半数近くの対象者が「気にしない」と回答した。「気にする」と回答した生徒は、「(学力の少し上の親友は) 自分と近いというか競争心があるというか、あとはそんなに気にならない」(D)「サッカーの面でも勉強の面でも U(親友の名前) ですかね」(G) といった語りがあった。そのことから、学力・成績の近い親友がいる生徒は競争心が煽られ、その結果として学習面での対抗意識が高まると思われる。「気にしない」と回答した生徒は、「(友達との間で試験・成績の情報交換は?) 何もなかったかのように他の話をしています」(C)「(勉強の話は)『家で勉強した?』とかそれくらい。みんなそんなに(勉強が)好きじゃない」(J) といった語りが見られた。したがって生徒は、本人を含め周りの友人が成績に無関心であるため、本人も成績を気にしなくなると思われる。

対照群の生徒は、半数が成績・学力を気にしていた。成績を気にしている生徒は、「私はこの人(友人)を尊敬してて、(苦手な)数学はこの人を目指して近づきたいなって思ってる」(L)「K(友人の名前)と僕とで(定期試験の成績で)毎回勝負してる」(R)と、学力・成績の近い親友がいる生徒は競争心が煽られる傾向は貧困家庭層の生徒に近い。「気にしない」と回答した生徒は、「あまり分からないというか、みんな全然(進路が)違うんで」(N)「自分の行きたい学校とは違ったりするんで」(P)と、進路の違いから成績・学力を気にしなくなると思われる。ただ、対照群の生徒は「大学進学」という目標が周囲の雰囲気として存在するため、別の形で学習意欲が促される可能性がある。

学習観・学力の実態に関しては、学習時間は貧困家庭層より対照群の生徒の方が長い。学習時間が短い背景としては、貧困家庭層の生徒の場合は家庭環境、対照群の生徒は既に推薦入試等で受験が終了したなどの要因が挙げられる。成績と「友人の学力」との関連性を見ると、荻谷（2001）などの学力研究でも指摘されているように、親の家庭環境が子の就学意欲に影響を及ぼす意欲格差が見られた。貧困家庭層の生徒は、友人の成績・学力を「気にする」生徒は中位の成績ランクに位置しているものの、「気にしない」生徒は成績ランクで中よりやや下の成績をとっていた⁶⁾。一方対照群の生徒はどの生徒も中～上の成績水準に位置し、友人の成績・学力を「気にする」かどうかには違いが見られなかった。そのことから、友人の学力が重視される要素としては家庭だけでなく、本人・友人の成績の程度や、親友・友人が学力の近い競争相手かどうかに関係すると考えられる。

4.3 対象者の進路形成過程

親の子に対する進路希望に関しては、子の置かれた立場により親の教育期待に違いが生じることが予想される（表 4）。そこで生徒の進路展望の特徴について、貧困家庭層の生徒と対照群の生徒に分けて検討する。

貧困家庭層の生徒に注目すると、中学生の場合親の進路希望に関しては、子どもの高校・大学進学を望んでいるせいか、内申点や成績の上下を気にするようである。だが「芯のしっかりした、周りに流されないで、ちゃんと自分の意思を貫いてとか、そういう大人になってほしい」（H・中学）のように、進路選択より一人前の大人としての成長を重視するようである。基本的には将来の職業をある程度決めている。親や友人などへ進路相談をした経験のある生徒は比較的多く、相談経験がなく進路展望が曖昧な F を除き、具体的な展望を描く生徒がよく見られた。高校生の語りでは、親の進路希望に関しては、中学生の対象者は内申点や成績の上下を気にする語りがよく見られたのとは対照的に、相談経験がない対象者も半数に留まるうえ、基本的に親は、「そんなこと自分のことだから親と話したってしょうがないじゃん」（E）のように、子どもへの進路面の干渉はあまりしない。

進路展望に関しては、高校進学の段階で同じ学力水準の生徒と接していることや、高校 3 年の場合は既に進路を決める段階に入ったこともあり、学校進学希望はある程度洗練され、学校の進学先は決定しているようである。生徒の多くは大学や専門学校の進学を想定して進路を展望するものの、「自分のやりたいことだった会社に勤めてもいい」（D）のように、親や友人など進路相談経験があるかどうかで（表 4「進路経験のサポート」）、どの職業に就きたいかなど具体的な進路展望を先延ばしにする傾向があると考えられる。

対照群の生徒は、「大学進学希望」「進路展望」とも全員「ある」と回答していることが影響してか、親の進路希望として過剰に干渉する様子は見られない。この点は、貧困家庭層の生徒における親の教育方針と近似している。進路展望に関しては全員大学進学を希望しているが、「大学進学後に考える」と回答した R を除き、「就職とかが厳しくなってる、

表4 親（保護者）の教育方針と対象者本人の進路展望⁷⁾

	性別・学年	親の子に対する教育方針	大学進学希望	将来希望する職業	進路展望の有無	進路相談のサポート
A	男性・高校1年	あらかた学力がついていて常識はもちろんついでいなきゃいけない。	○	小学校教師	×	×
B	男性・高校2年	今は遊んでおけ。別にサラリーマンとかにならなくても生きていけるから。	○	父経営の店で働く	○	○ (親)
C	男性・高校2年	行くなら就職か専門学校、まあ自由にしなさい。	×(専門学校)	ウェブプログラマー	×	×
D	女性・高校3年	学力とかはあんまり心配しないというか、私がほどほどにやっている。	○	デザイン系の仕事	×	○ (親・友人)
E	女性・高校2年	「勉強した方がいいんじゃない」とは言うけど、それ程うるさく言わない。	×(専門学校)	管理栄養士	×	○ (親)
F	男性・中学1年	人に優しい人になって欲しい。テストの点数が悪かったら勉強させる。	×	パティシエ・動物病院	×	×
G	男性・中学3年	親的には都立(高校)に行ってほしい。特に高卒後は、何も期待していない。	×	外国関係の仕事	×	○ (友人)
H	女性・中学3年	周りに流されないで、ちゃんと自分の意思を貫く大人になって欲しい。	○	会社員	○	○ (親・担任)
I	女性・中学3年	別に私がやりたいことがあるんだったらそれをするために頑張らなさい。	○	料理雑誌のライター	○	○ (親・友人)
J	女性・中学3年	普通よりはいい高校に行きなさい。偏差値の低い高校はなるべく避ける。	○	イラストレーター	×	○ (親)
K	男性・高校3年	一つの物に集中しろとか、行動をする時は責任をもってやれなど常識的なこと。	○	学校の先生	○	○(親・友人・先生)
L	女性・高校2年	お父さんもお母さんも強要してこないけど、多分気を使ってくれてると思う。	○	法律関係の会社員	○	○ (親・友人)
M	女性・高校3年	ある程度いい大学に進むなど、自分の納得できる人生を歩んでくれればいい。	○	出版関係の会社員	○	○ (親)
N	男性・高校2年	自分の目線からは、(進路上の)期待とかそういうのは感じない。	○	父親の会社に就職	○	○(父・予備校教師)
O	女性・高校3年	家のことをちゃんとやる子とか、一般常識がちゃんとできてる子とか。	○	料理関係の仕事	○	○ (親・担任)
P	男性・高校2年	普通に大学行って就職して、普通に孫の顔見せてくれればいい。	○	自動車会社のエンジニア	○	○ (親)
Q	女性・高校2年	大学に行って欲しい、そして人間的な感じでは、規則正しい生活をしなさい。	○	美術の先生かデザイナー	○	○(親・学校の先生)
R	男性・高校1年	「もう私から口出しすることはない」みたいな感じなので、自由にやっています。	○	大学進学後に考える	○	○(親・学校の先生)

っているのが問題になってるので、高卒で就職は厳しそう」(N)のように、既に現在の就職状況を客観的に見通した上で進路を決定している。また、進路展望を先延ばしにしているR君も、「行くとしたら法律関係か、商学とか経済関係かそっち系かな」と語っているが、父親や母親と進路を相談し、どの系統の大学に進学するのかを想定していることから、進路相談ができる身近な他者によるサポートが進路展望を促す役割を果たすと思われる。

進路展望に関する特徴をまとめると、以下が両者に共通している。第1にほとんどの対象者には希望する進路があり、職業に就くために大学や専門学校の進学を想定している。第2に、基本的な生活習慣や社会人として身につけるべき素養など、最低限必要な生活スキルの習得や、最低限就職に必要な学歴の取得を希望している。それでも、両者で異なる

点は、進路展望に対するスタンスとサポート体制である。貧困家庭層の生徒は、希望の職業に執着する姿勢は乏しく、上級学校の進学以降で考えるか、実際に進路を決定する段階になってから決める生徒が多いことから、親による子どもへの進路希望は、子どもの職業観に直接影響を与えるものではない。一方対照群の生徒はほとんど身近な他者との進路相談を経て、既に進学先の大学や具体的な職業を想定していた。このことから、本人が進路や将来の職業を考えるかどうかは、本人の進路希望の程度や、家族や友人といった身近な他者による進路相談サポートの有無がある程度影響すると考えられる。

5. まとめと考察

本稿では、経済的にゆとりのない家庭の中学・高校生を対象とした聞き取り調査をもとに、貧困家庭に暮らす青少年が織りなす生活と人間関係の実態に焦点を当ててきた。

第1の視点である貧困家庭層の生徒の学力実態については、日常生活の学習時間が比較的少なかったり、学習塾や予備校に通わなかったりするなど、勉学に励む生活習慣や学習環境の面でデメリットを抱えている。だが学校成績は中程度をとる生徒が多く、同じ学力を有する生徒が進学する高校の段階で成績水準が分岐していた。第1の視点に関する本稿における知見は、貧困家庭の生徒における学力形成過程には多様性が存在していることである。貧困家庭の中高生と学力の先行研究によれば、貧困家庭の生徒は勉強できる場所がなく、保護者や友達との関係が安定しないため低学力となり、学習意欲が低いことから学校から離反する価値観が生まれる上（高田 2008）、生徒をサポートする役割を担う教師や友人といった「援助のネットワーク」が脆弱となり学校不適応を起こすとされる（大澤 2009; 青木編 2003）。分析結果をもとに貧困家庭層の生徒と対照群の生徒との比較を行えば、友人の学力・成績を気にする生徒は、結果的に学習に対する競争心を喚起させ、貧困家庭層の生徒における「負のチャーターの脱却」（古賀 2004）を図らせる可能性が示された。したがって貧困家庭層の生徒は、生徒本人が成績や学力に興味をもち、競争相手となる友人やサポート役の教師がいるかどうかで学習意欲の変化に関与すると考えられる。

第2の視点である貧困家庭の生徒における進路形成は、親の進路希望によりデメリットを受ける可能性があるが、全体的にはほぼ全員に希望する進路があり、友人や家族からのサポートが本人の進路形成を左右する（表4）。また、ほとんどの子どもは希望する職業があり、職業に就くために大学や専門学校の進学を想定している。

これまで貧困家庭層の生徒の進路形成に関する先行研究によれば、子どもの低学力と家庭環境の関連性（荻谷 2001; 荻谷・志水編 2004）や、家庭関係資源が進路形成に影響を及ぼす知見（大澤 2009）のように、家族との関係性が将来展望をより顕在化させる誘因として機能するとされた。先行研究の知見を踏まえて分析結果を解釈すると、貧困家庭層の生徒は進路選択の点で教育格差が介在し、進路選択を先延ばしにする傾向にあることは先行研究の知見に近似していた。だがどの対象者も将来希望する職業があるほか、親だけ

でなく教師・友人からの進路相談サポートが、進路選択を決定する要素として機能していた。この点が本稿における知見である。本稿の調査結果を概観すると、親や友人など進路相談ができる相手がいる貧困家庭の生徒は、将来展望が明確で将来就きたい職業も具体的なものに対し、相談相手のいない貧困家庭の生徒は、将来展望が曖昧で、将来就きたい職業もやや抽象的な職業を回答していた。したがって貧困家庭層の生徒にとっては、教師や友人からの進路相談サポートが社会関係資本（「援助のネットワーク」）として機能し、将来の進路形成や学校適応を促すという点において意義があると考えられる。

コールマン（1988=2006）にみられた社会関係資本の「世代的閉鎖性」に着目して貧困家庭層・対照群の生徒の語りに当てはめると、対照群の生徒は、親友が主として「友人からの影響→成績・学力を気にする→進路相談サポート」という図式で重要な役割を果たしたことから、親友による「つながり」が進路選択に有効に機能しているといえる。貧困家庭層の生徒は、学力状況や家族・友人関係が多様であることから、友人や家族、担任の先生など日常生活で依拠する社会関係資源の親密度や、成績や学力に関する関心の強さが、貧困家庭の生徒の進路選択をサポートする上で重要になると考えられる。ただ本稿では、調査過程において対象者の偏りやサンプル数などに一定の制約がある。そのため、本稿での知見を詳細に検証するためには、比較的サンプル数が大規模な調査を改めて実施する必要があると考えられる。今後は、経済的にゆとりのない家庭に住む中高生の友人関係の形成過程に注目しながら、追加調査を実施しつつ、本人のアイデンティティ形成と社会関係資本との間に関連性があるかを詳細に検討していくことが課題である。

[注]

¹⁾ 厚生労働省によれば、相対的貧困率とは、等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割った数）の中央値の半分に満たない世帯員の割合であり、所得の低い貧困世帯を示す指標となる（2010年度の等価可処分所得の中央値の半分は年間112万円で、相対的貧困率は16.0%）。一方「子どもの相対的貧困率」とは、18歳未満の子ども全体に占める等価可処分所得の中央値の半分に満たない世帯員の割合であり、低所得家庭に育つ子どもの割合を示す。

²⁾ さらに2014年8月には、政府は子どもの貧困対策法を受けて「子供の貧困対策に関する大綱」を閣議決定した。大綱では、①スクールソーシャルワーカーの配置推進や高校生向け給付型奨学金の充実等の子どもの学習支援、②資格取得や高校卒業者認定試験費用の補助など保護者の就労支援が柱で、教育費の負担軽減や学校と家庭の連携を推進することを構想している。

³⁾ 欧米諸国の「貧困の社会的再生産」に焦点を当てた先行研究によれば、不平等な階級格差の再生産が指摘されてきた（Bourdieu & Passeron 1970=1991）。ブルデューらは、中産階級と労働者階級の子どもに生じる階級間格差は、家庭での言語や習慣などの文化資本の格差に由来すると指摘した。また労働者階級の子どもたちは、学校進学後に学業への劣等感を抱くうちに、ホワイトカラーを批判する反学校的な価値観を志向し、自ら進んで労働者階級の仕事に就

く傾向にあるという (Willis 1977=1985)。

4) 長谷部 (1993) によれば、生徒は自ら進んで進学といった競争秩序に背を向けるが、自身が劣位におかれることで、彼らは劣位から脱却する意志さえも剥奪されている傾向にあり、生徒が学校不適応となる状況を〈学校のこだわりの希薄さ〉と表した。

5) インタビュー・スクリプトを俯瞰すると、教師による生徒指導に関しては、教師は単に厳格に指導するというよりも、生徒の個性を尊重した上で弾力的に指導をする様子だった。但し生徒は、貧困家庭層・対照群の生徒に関係なく、変なところで校則が厳しいことに不満を漏らしていたものの、学校生活とは関係ないものと捉えており気にしない様子であった。

6) 学業成績は自己申告のため、客観的に判定するための指標としては乏しい可能性がある。それでも成績が全員下のランクではなく、「友人の学力を気にするか」「競争相手の有無」によって成績に違いがみられた点に関しては、貧困層における低学力傾向を指摘する先行研究 (高田 2008 など) から見れば興味深い示唆であるといえる。

7) 「進路展望」とは、例えば「専門学校に進学しパティシエになる」のように、対象者が学卒 (対象者が中学生の場合は中学卒業、高校生の場合は高校卒業) 後に、自分が将来の職業に就くための進路を描いているかを尋ねたもの。「進路相談のサポート」とは進路選択で親または保護者、教師・友人などの身近な他者と、これまでに進路相談やアドバイスを受けた経験があるかどうかを尋ねたもの。なお、中学生の対象者 (F~J) は全員高校進学を希望している。

〔参考文献〕

阿部彩, 2008, 『子どもの貧困』岩波書店。

青木紀編, 2003, 『現代日本のみえない貧困』明石書店。

青木紀・杉村宏編, 2007, 『現代の貧困と不平等』明石書店。

新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ」『教育社会学研究』71 : 151-169。

Bernstein, Basil, 1996, *Pedagogy*, London & Bristol: Taylor & Francis (=2000, 久富善之訳『「教育」の社会学理論』法政大学出版局)。

Bourdieu, Pierre & Passeron, J. C, 1970, *La reproduction*, Paris: Editions de Minuit (=1991, 宮島喬訳『再生産』藤原書店)。

知念渉, 2012, 「〈ヤンチャ〉な子らの学校経験」『教育社会学研究』91 : 73-94。

Coleman, J. S, 1988, "Social Capital in the creation of Human Capital", *American Journal of Sociology*, Vol. 94, pp.S94-S120 (=2006, 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編『リーディングス・ネットワーク論』勁草書房, pp.205-242)。

長谷部裕, 1993, 「生活困難層の青年の学校「不適応」」久富善之編『豊かさの底辺に生きる』青木書店, pp.107-146。

平塚眞樹, 2007, 「移行システム分解過程における能力観の転換と社会関係資本」『教育学研究』73(4) : 394-402。

- 池田寛, 2003, 「コミュニティの再生と学校改革」池田寛編『教育コミュニティづくりの理論と実践』部落解放・人権研究所, pp.71-87.
- 乾彰夫編, 2006, 『18歳の今を生きぬく』青木書店.
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ』中央公論社.
- , 2001, 『階層化日本と教育危機』有信堂高文社.
- 荻谷剛彦・志水宏吉編, 2004, 『学力の社会学』岩波書店.
- 木村和美, 2008 「マイノリティによるネットワーク形成と社会関係資本」『教育社会学研究』83 : 65-83.
- 古賀正義, 2004, 「学校化社会の中の「中退問題」」古賀正義編『学校現場のフィールドワーク』嵯峨野書院, pp.156-174.
- 小西祐馬, 2004, 「調査報告：子どもの生活と社会階層」『教育福祉研究』10(2) : 17-40.
- , 2006, 「子どもの貧困研究の動向と課題」『社会福祉学』46(3) : 98-108.
- 久富善之, 1993, 『競争の教育』労働旬報社.
- 松本伊智朗, 2008, 「貧困の再発見と子ども」浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編『子どもの貧困』明石書店, pp.14-61.
- 中澤香織, 2009, 「シングルマザーの性別役割意識」『教育福祉研究』15 : 11-21.
- 大澤真平, 2008, 「子どもの経験の不平等」『教育福祉研究』14 : 1-13.
- , 2009, 「高校生の進路選択と貧困」『教育』59(5) : 39-44.
- Parcel, T. L., M. J. Dufur, and R. C. Zito. 2010, "Capital at Home and at School: A Review and Synthesis", *Journal of Marriage and the Family* 72(4):828-46.
- 盛満弥生, 2011, 「学校における貧困の表れとその不可視化」『教育社会学研究』88 : 273-294.
- 高田一宏, 2008, 「同和地区における低学力問題」『教育学研究』75(2) : 180-191.
- 高山武志, 1981, 「教育と貧困」江口寿一編『社会福祉と貧困』法律文化社, pp.115-134.
- 上間陽子, 2009, 「貧困が見えない学校」湯浅誠・富樫匡孝・上間陽子・仁平典宏編『若者と貧困』明石書店, pp.139-159.
- Willis, E. P, 1977, *Learning to Labour*, Surrey: Ashgate Publishing (=1985, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房).

付記：本研究は平成 20～22 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）, 課題番号：20330108）の助成による研究成果の一部である。